

新収蔵資料展 —中村雅之旧蔵資料を中心に

会期：[令和7年12月10日～令和8年2月23日](#)

歌人・中村雅之（本名・正行）は、昭和3年に津軽半島の寒村・車力村（現・つがる市）に生まれ、令和7年2月に他界した。早くから農業にいそしみ、土とともに暮らしてきた日々が歌の根底にある。昭和47年、江流馬三郎の筆名で発表した「縦走砂丘」50首により、本県初の角川短歌賞を受賞。かけがえのない風土と人生を歌い続けた生涯であった。

本展では中村雅之旧蔵の直筆資料・歌稿などを中心に展示。色紙「田つくりも今宵かきりと焼く藁の赤き火見つむ妻と並ひて」（平成20年「歌会始の儀」入選作品）、歌稿「白血病やみて十年白髪のおとなりしが 血はまだ赤い」（令和6年「観桜県下短歌大会」第2位）など10首を紹介した。

中村から坂本文範氏（歌人・坂本文雄の長男）に送られた書簡7通（平成30年～令和7年）には、主著『坂本忠一の短歌とその時代』の趣旨、坂本文範著『坂本文雄歌集『菜の競り』拾遺 一付、弘前アララギ会の黎明—』の感想、自身の歌集刊行への意欲、青森県文化賞受賞の喜び、令和7年度企画展にて郷土文学館で展示されることへの期待などが記されている。また、ロビー展では、青森県歌人懇話会副会長の藤田久美子氏（歌人・書家）に宛てた5通の書簡（令和6年）も展示。「瀕死の身」ながら歌を作り続け余命を全うしたいという願いなどが記されている。

ラウンジのひととき（報告）

令和7年12月6日に行われたラウンジのひとときは、福士正一氏（舞踏家）による「舞踏ダンスしゅうさんの家のほうへ」であった。福士氏は、青森県のみならず海外でも活躍する舞踏家である。これまでの活動の写真を観ながらの解説で始まり、踊りは、その場の雰囲気やインスピレーションなど、感じ取ったもので常に即興で行うとのこと。会場は2階のラウンジであったが、後半は雪のある追手門広場に出て舞い、広場にいた人も足を止め、また観客も外に出て鑑賞するという文学館では初めての体験であった。その場にいた人々は圧倒され、〈福士正一の世界〉に引き込まれていった。



お知らせ

〈北の文脈文学講座〉第3土曜日 午後2時～3時

5月23日（土） 「誠実の芸術家～太宰治と今官一」
※第4土曜日 講師：吉永麻美氏
（太宰治展示室・太宰治文学サロン学芸員〈三鷹市〉）

6月20日（土） 「太宰治と私の郷愁の散歩道」
講師：長尾勝文氏（語る会）

〈文学忌〉

忌日を含む1週間程度ロビー展示を行います。
忌日は無料開館、午前10時より朗読があります。

5月18日 平田小六 6月3日 佐藤紅緑 6月19日 太宰治
7月23日 葛西善蔵 9月2日 陸羯南

写真でたどる太宰治『津軽』

会期：[令和8年4月15日～令和8年7月6日](#)

太宰治の小説『津軽』は、太平洋戦争末期の昭和19年、太宰が約3週間をかけて津軽半島を巡る旅の中で、ふるさとを再発見し「津軽人」としての自己を探しあてる物語である。

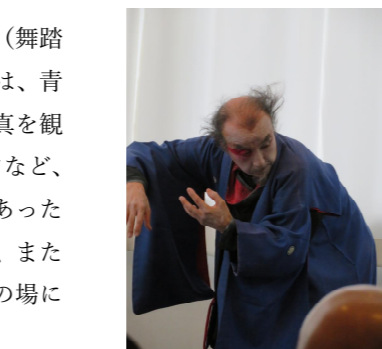
本展は、太宰ならではの視点で書かれた心に響く名文と、現地の美しい風景写真で小説『津軽』の舞台をたどり、改めてその魅力に迫るものである。今回は、太宰の親友・伊馬春部（作家・劇作家）が、昭和31年に撮影した龍飛・十三湖などの写真も特別に展示する。

「龍飛だ。」とN君が、変った調子で言った。
「ここが？」落ちついて見廻すと、鶏小舎と感じたのが、すなはち龍飛の部落なのである。凶暴の風雨に対して、小さい家々が、ひとひとかたまりになつて互ひに庇護し合つて立つてゐるのである。ここは、本州の極地である。この部落を過ぎて路は無い。あとは海にころげ落ちるばかりだ。路が全く絶えてゐるのである。ここは、本州の袋小路だ。

（『津軽』より）



龍飛（昭和31年） 撮影 伊馬春部



〈ラウンジのひととき〉第1土曜日 午後2時～3時

6月6日（土） 「朗読 今官一〈はるかなるもの〉へ」
出演：林本恵美子氏（朗読家）

7月4日（土） 「太宰治の翻案作品ドラマリーディング」
※無料開館日 出演：声優劇団 津軽カタリスト

〈開館記念 無料開館〉

7月1日は開館記念日です。記念日を含めた3日間、無料開館を行います。

開催日：7月1日（水）、4日（土）、5日（日）

北の文脈ニュース 第94号

Kitano bunmyaku news



第50回企画展

『壁の花』直木賞受賞70年

今官一 —わが友 太宰治

会期：[令和8年4月1日～令和9年3月21日](#)

作家・今官一は、太宰治の「桜桃忌」の命名者として知られ、太宰と同じ明治42年（1909）、弘前市に生まれました。2人は昭和2年に初めて出会い、同人雑誌『海豹』『青い花』などで活動を共にし、〈文学の友〉〈心の友〉として、その交流は太宰が他界する昭和23年まで続きました。

太宰が第一創作集『晩年』（昭和11年）を官一に贈る際、「誠実、花咲いては、愛情」ではじまる献辞を認めました。また、空襲が激しい戦争末期、海軍に召集された官一から預かった原稿を、太宰が戦火をくぐり抜け死守したというエピソードも伝えられています。

令和8年（2026）は、官一が小説集『壁の花』で青森県初の直木賞を受賞してから70年の節目にあたります。本展は、第一章で、深い絆で結ばれた官一と太宰の交流の軌跡をたどり、第二章では、『海鷗の章』『幻花行』『壁の花』など、知的で詩情にあふれ〈はるかなるもの〉へのロマン漂う、官一の作品の魅力に改めて迫ります。

〈展示構成〉

第一章 わが友 太宰治

誕生 出会い 文壇デビュー 誠実、花咲いては、愛情 作家としての転機 碧落の碑 治さん。さやうなら。

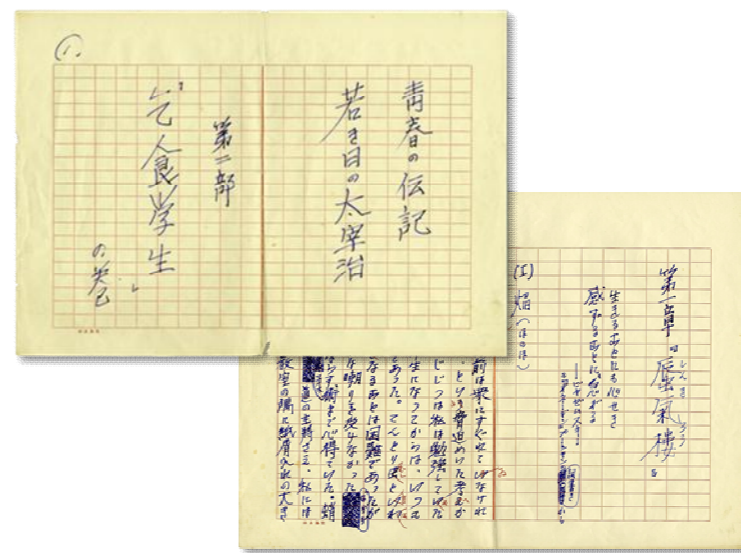
第二章 『壁の花』直木賞受賞70年

寄稿「今官一文学の魅力——『壁の花』を中心に——」仁平政人

今官一代表作品

『海鷗の章』『龍の章』『幻花行』『壁の花』『牛飼いの座』『巨いなる樹々の落葉』

資料紹介 今官一愛用の品 原画 文学碑 色紙 アルバム 単行本一覽



今官一原稿「青春の伝記 若き日の太宰治」第二部「乞食学生」の巻

〈青森県近代文学館蔵〉



昭和43年、今官一は『青春の伝記』太宰治（上）おしゃれ童子の巻』を刊行。その続編として『乞食学生』の巻の原稿を書いていた。前者で太宰が「いやおうなしに外から与えられるもの」、後者で「積極的に外に求めたもの」を解明したいという官一の意図があった。しかし、「乞食学生」の巻の出版は実現しなかった。

企画展記念講演会のお知らせ

演 題：今官一の文学—「場外れ」のモダニストの魅力—(仮)
講 師：仁平 政人氏（東北大学大学院文学研究科教授）
日 時：令和8年8月22日（土）午後2時～3時30分
会 場：弘前市立観光館 多目的ホール

・日程等は変更になる場合があります。
・詳細は文学館ホームページ、広報ひろききなどでお知らせします。

第50回企画展

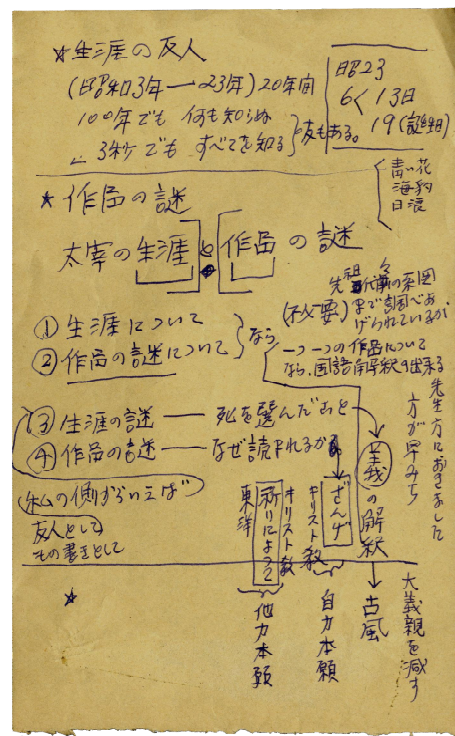
『壁の花』直木賞受賞70年 今官一 ―わが友 太宰治』より 今官一関係資料紹介

□ 原稿「海の百合」



今官一の小説「海の百合」は、海を見下ろす別荘に住む戦争未亡人が、「半開きの、つぼみのままで」毎夜誰かを待つ話。若き「憂愁夫人」の心理の動きが美しい旋律を奏でる。「海の百合」は昭和24年に脱稿し、31年、小説集『壁の花』に収録された。同年7月、官一は『壁の花』で第35回直木賞を受賞する。

□ 太宰治についての構想メモ



今官一は太宰治を「生涯の友人」と記し、そこには「100年でも何も知らぬ／3秒でもすべてを知る 友もある」という印象的なフレーズが書かれている。官一はこのメモで、「謎」をキーワードとして、太宰の生涯と作品を解明しようとしている。

□ 直木賞受賞・小説集『壁の花』



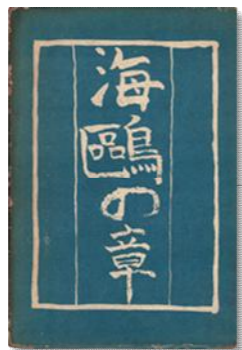
『壁の花』藝術社 昭和31年3月30日



『壁の花』表紙原画 〈青森県近代文学館蔵〉 画：阿部龍応（合成）

昭和31年7月、小説集『壁の花』によって今官一は第35回直木賞を受賞した。作品は「暗い葦」「海の百合」「華麗なるポロネーズ」「星の下のクワルテット」の4編で構成される。表題の『壁の花』は「星の下のクワルテット」に登場する言葉で、自分の性に合った相手としか踊らないために壁際に売れ残った踊り子の意味である。「星の下のクワルテット」は昭和26年、『新作家』第2号に発表され、ほかの3作は未発表作品であった。

□ 第一小説集『海鷗の章』



『海鷗の章』竹村書房 昭和15年9月17日

今官一の第一小説集。「海鷗の章」のほかに、「聖母に（序に代へて）」「シアンルル」「鮐」「候鳥」「糞供養」「水族」「狸」を収載。表題作の『海鷗の章』は昭和10年12月の『作品』に発表され、当時もっとも権威のあった朝日新聞の匿名コラム「豆戦艦」で、「今官一の『海鷗の章』に現代の新しい浪漫主義の相当高い匂いと美しさを見ました」と評された。

□ 愛用品



パイプ 〈青森県近代文学館蔵〉

書齋の風景から 今園子

書齋には、二本の短い角の生えた髭ヅラの男の人がニッと笑ってこっちを見ている写真のような絵が飾ってある。自分に似ているから飾っているのかな と思っていた。

鴨居の上にはショートピースの空箱が並ぶ。インクのような濃紺の箱。中の銀紙を重ねてまん丸の球も作っていた。机の上には楽しい小物がいっぱい。鮭の皮でできた小さなブーツ、アイヌの首飾り、フィリピンのたて笛、のぞくと中の絵が変わるミニカメラ型のライター。なにをさわっても怒られたことはない。

原稿は外国製のブルーブラックのインクに万年筆をつけつけ書いていた。万年筆なのにインクをつけて書くなんでヘン、と子供心にも思っていたけれど、そうやって書くのが書きやすいのだろう、とも感じていた。

江戸むらさきくらの広口のインク瓶にはフチのところにインク溜りになるような小さな溝がついていて、ペン先をそこで軽くしごいてから書いていた。インクが減ると大きな箱から注ぎ足していたように思う。修正箇所は丁寧に網目線を重ねて隠し、横に丸く囲って文章を書く。原稿ってそういう風にも書くものなのだ、と思っていたから後年他の作家のラフな原稿を見てびっくりした覚えがある。

わたしが小学五年生の時に家族の元から出奔してしまったからしばらく会わなかったけれど、高校を卒業してモラトリアム生活を送っていたわたしを映画に誘ってくれたことがある。少し緊張して会った。渋谷の東急パテオンの前の方に二人で並んで座って007を観た。ショーン・コネリーがなにかするたびにふっふっふと笑っていた。その後ときどき公恵夫人との住まいに遊びに行った。わたしと公恵さんがおしゃべりしている横で、つけっぱなしのテレビに目をやりながらまたふっふっふと笑っていた。

新資料紹介

今官一原稿

「脆く小さな桜の実——『桜桃忌』再説——」(全13枚)

この原稿は、今回の企画展のために入手。本展が初公開となる。

太宰治が他界した翌年の昭和24年、今官一は「桜桃忌提唱」を『文藝時代』に発表。しかし、その内容が『桜桃忌提唱』になっていないことを反省し、「再説」として書いた文章。太宰の親友であった官一と伊馬春部が、三鷹の禅林寺に太宰の墓ができた日、雨に叩き落とされた「脆く小さな、むしばんだ桜の実」を見て、ほぼ同時に「桜桃忌」と叫んだ時の心の動きを書いている。本文は、『現代国民文学全集』（角川書店・昭和32年）の月報に発表され、後に『わが友 太宰治』（津軽書房・平成4年）に収められた。

今園子氏の寄稿文にあるように、独特の修正の仕方も見て取れ、また、タイトルと署名も大きく堂々としているのが特徴である。

この度、今官一の孫にあたる今園子さんにご寄稿をいただきました。直筆の原稿をパネル展示しております。今官一の直筆原稿とともに是非ご覧ください。

もらった物やもらってしまった物はいくつかある。電球の点くランプやへびの形の重たい飾りは何度かの引越しの間に手放してしまったけれど、英字新聞のほんとうにあった不思議な話欄の切り抜きを自分で綴じて作った本やマッチラベルのスクラップブックは今も本棚の片隅にある。星の形の水晶のペンダントは何度か胸につけた。特別なお出かけの時に。津軽塗の小箱の中にもしまっ

てある。母は子どもの頃病弱でよく鼻をつまらせていたという。そんな時、鼻に口をつけて鼻水を吸い出してくれたのよ、と話してくれたことがあった。男親がそんなことをするなんて、とひどく感銘を受け自分も子どもにはそうしてやろうと心に決めた。実際は泣くばかりでうまくできなかったけれど。それがひ孫。今年うれしかったことはひ孫が生まれたことです、と帰ろうべき土地弘前の地で語っていたと聞いた。亡くなる半年前のことである。

(こん そのこ 今官一・孫)



祖父・官一と

